

「テープレコーダーのあった風景」

五房 

西 志郎

目次

プロローグ	2 ページ
テープレコーダーとの出逢い (TC-101)	3 ページ
ソニー TC-777 テープレコーダー	5 ページ
ソニー TC-111 テープレコーダー	6 ページ
小学校の放送部御用達、東京通信工業	7 ページ
カセットの初代 フィリップス	8 ページ
オープンリールからカセットへ、変遷の兆し	9 ページ
3インチ・ポータブル ソニー TC-900	11 ページ
テープレコーダー、入学祝いの錦の御旗	12 ページ
ソニー TC-6250 テープデッキ	14 ページ
カセットテープデッキの初代、TEAC A-20	15 ページ
テープレコーダーでのロールプレイ新人研修	16 ページ
ナショナルのカセットレコーダー (RQ-413)	17 ページ
サンスイ「ポルタ・コンポ」 CP-7	19 ページ
マイク端子のない CD ラジカセ	21 ページ
ソニー TC-6250 (多重録音改造機)	22 ページ
ソニー「カップブックス」	23 ページ
サンヨー オットー RD-5600 カセットテープデッキ	24 ページ
マイクロカセット・テープレコーダー 4種	25 ページ
テクニクス RS-1506U「2 トラ 38」	27 ページ
ソニー TC-357 テープレコーダー	28 ページ
カセット・ウォークマンの行き着いたところ	29 ページ
一応の究極、TCS-90 カセットテレコ	31 ページ
カセットレコーダーは生き残るか？	32 ページ
Tascam リニア PCM レコーダー	34 ページ
ソニー、サーボマチック 6 (TC-860)	35 ページ
ソニー、TC-1000 と 1000B	36 ページ
TCM-1000A の定期健康診断	37 ページ
エピローグ	40 ページ

プロローグ

「レコード」が CD に主役の座を明け渡して久しいが、「レコード大賞」なる言葉が存続する間は、何を指すのか通じない死語にはならないだろう。では、「テープレコーダー」はどうか。

「〱 去年のあなたの思い出がテープレコーダーからこぼれています。」
（「精霊流し」－ 1974年、さだまさし作詞作曲）ラジカセ出現より前の時代の歌が今に歌い継がれるのは喜ばしいが、若者に「テープレコーダー」が通じるのかどうか、心配になる。少なくとも、カセット以前にオープンリールの時代があったことは、通じない公算が大きい。

レコードから CD へ、磁気テープから MD を経て IC メモリーへの、メディアの変遷はさておき、個々人が録音再生を楽しむ、という、元々テープレコーダーが持っていた特質は、どうして影が薄くなったのだろうか？

疑問の発端は、5年前の 2010年、「録音の歴史」企画展示の図録を書いたとき。昔使ったテープレコーダーの年代確認のために、自分のアルバムを見直したら、結構な枚数の写真にテープレコーダーが脇役として登場するではないか。もう一つのキッカケは、ネット上の「電卓博物館」に居候する形で公開させて貰った「電卓のあった風景」で、テレビのドキュメンタリー番組が用いる「再現シーン」という表現手法が、静止画なら、私にも可能なことに気づいてしまったこと。その二つが頭の中で融合して出て来たのが、「テープレコーダーのあった風景」なる切り口である。

音響文化史を綴ろうと構えている訳ではなく、過去半世紀に亘って変わらないスタンスで、テープレコーダーや、その後継機たちと接して来た一個人の体験を振り返っているに過ぎない。それを他人様の眼で外から眺めたとき、時代と共に変ったもの、変らないものがあぶり出されたら良いなあ、という仄かな願望はある。完成度は見切り発車して、公開に踏み切ったのは、一人で迷うより、反論や共感、質問を寄せられる方々の声を反映させていただく方が道を誤る危険性は少なからう、との読みから。信頼性はその程度、という前提でお読みいただきたい。

2015年 4月 西 志郎

テープレコーダーとの出会い（TC-101）

私が生まれて初めて録音に使ったテープレコーダーは、ヴァイオリン教室にあった、ソニーの TC-101 型「テープレコーダー」。（誤植ではない。ソニーは商標登録の「テープレコーダー」を用いた。） 1960年頃のことである。

今日、日本国内よりも海外での評価の方が高い「スズキ・メソッド」は、当時「才能教育」の名で呼ばれており、音楽を耳から繰り返し聴くことに重点をおいていた。優れた演奏家のレコードから音楽表現を学ぶと同時に、自分の演奏をテープに録音して、客観的に聴くことで、何が問題なのかを気付かせようとした。人間誰しも、自分の欠点には甘いもの。その点、テープレコーダーほど重宝な道具はなかった。粗を誇張しているのではないかと邪推したくなるくらい非情なのだ。

初等科、高等科、研究科の卒業試験には、松本の本部に演奏テープを提出する関門があった。今も手許に残るオープンリールの録音テープは、その TC-101 で録音したもの。



ソニー(株)、TC-101、1959年、29, 800円

防音スタジオを借りるまでのことではないので、通常のレッスンが終わった夕暮れ時に気合いを入れて録音する。運悪く表の通りでクルマのクラクションが鳴ったりすると、その楽章の頭から入れ直し。普段は気にならないちょっとした生活騒音が録音の大敵だとは、そのときに学んだ。

表面に課題曲の演奏を納めたテープは、裏面に鈴木鎮一先生が演奏を聴かれた感想を吹き込んで返却される。そこまで丁寧な指導ができたのは、やはり初期の頃だけ。妹や弟のテープも残っているが、時代と共に、マスプロ化したのが見て取れる。鈴木先生の肉声入りテープは今や、お宝かも知れない。



今、動態保存している機械は、後年、骨董市で売りに出ているのを見つけ、懐かしさで思わず買ってしまったもの。神戸の骨董屋曰く、三味線のお師匠さんが、高齢で出稽古ができなくなった為、手放したものだと言う。付属品の 50Hz 用キャプスタンが失われていなかったお蔭で、横浜でもシッカリ鳴っている。単純なメカニズムは駆動ベルトを自作で補給できる限り、保守に不安はない。（引退させた 60Hz 用キャプスタンも、一応保存してある。）

マニア垂涎の TC-777

触ったことがある、という程度なら、もう少し年代が遡る。小学校 4年のとき（＝ 1958年）だったのは確かだが、後述の TC-777 では年代が合わないのだ。

父は、大学に奉職していて、給与とは性格の異なる研究費という費目を持っていた。所属する電気工学教室の研究テーマの一つに「アナログコンピュータによる音道解析」というのがあり、研究費でテープレコーダーを購入することが不自然ではなかった。それを子供に見せるために自宅に持ち帰ったのではないかと思う。型式は判らない。大型のトランクケースのような形のものが、蝶番を外すと、機械本体と左右のスピーカーボックスに別れる仕掛けに感心した記憶がある。

マニアの間では「スリーセブン」と呼ばれる、世界最初のオールトランジスタの高級機、1961年登場の TC-777 も一度持ち帰っている。これは、東京芸大の学生だった頃からソニー（と、社名を変える前の東京通信工業）に出入りしていた故大賀典雄氏が、社長退任のとき、数々のヒット製品の中で最も印象に残る製品として挙げたもの。ノンフィクション作家の山根一真氏も、時代の中で、どれだけ輝いていたかを語っている。私がそこまでの名器と知ったのは、ずっと後になってからのこと。



ソニー TC-111 テープコーダー



ソニー(株)、TC-111、1961年、19,800円

母はそういう公私混同を極端に嫌う人だった。家庭で使いたければ、公務員の薄給はたいてでも、家庭用を買うべき。タイミング良く同年、それまで最低で 29,800円だったものが 19,800円に下がった。ビックリしたのは、2台買って「声の便り」を目的に、1台を鹿児島の実家に贈ったこと。秋葉原で買って送るのに、西日本の 60サイクル（当時はヘルツとは呼ばなかった）専用機の手配には大分手間取った。当時の郵送用テープが残っているから、用途としては中々洒落ていたと言える。

小学校の放送部御用達、東京通信工業

このように、家庭でのテープレコーダーの利用は、ピアノやヴァイオリンを習わせるような家庭から、お稽古事に付随するものとして普及が始まった。

それ以前の業務用は、学校教育の現場に先に普及している。自分自身にはその体験はないが、後年、その魁となった時代の機種も集ってしまったので、時代は前後するが、ここで簡単に紹介しておこう。



フィリップス EL3530（1953年） 東京通信工業 P-3（1952年）

左はオランダ、フィリップス社の家庭向け初号機。電圧は 110V から 240V まで対応するので、米軍属が日本に持ち込んだのかも知れない。

右は、後に社名をブランド名の SONY に統一した東京通信工業の P-3型。P は Portable（携帯）の意味で、H（Home、家庭）よりは前、更にその前は G（Government、政府機関）だったので、用途拡大の経路を如実に物語る。磁気ヘッドをカバーで覆ってテープ挿入を助けるなど、先進的な設計思想が見て取れるが、重さ 13.4 Kg とあっては、学校の音楽室と講堂を行き来するのが精一杯だったろう。年齢に似合わず、当時の機械を懐かしがる人は、小学校の放送部員か、音楽関係のクラブに所属した人と見て、まず間違いはない。

カセットの初代、フィリップス

カセットテープレコーダーは、日本では、家電品として極めて特異な登場の仕方をした。1965年、銀座の三越本店が特選品売り場で取り扱いを始め、生活雑誌「暮しの手帖」がその使い勝手を持ち上げたのだ。ヴァイオリン教室の兄弟子、Hさんのお母さんがレッスンにそれを提げて来て、先生の指導を録音して帰る。暮しの手帖社にお勤めだったので、耐久テストを兼ねていたのだろう。オープンリールを知る身としては、お弁当箱ほどの大きさ、端では強制的に止まる幅の狭い録音テープなど、危なっかしくて玩具にしか見えないが、再生すると、ちゃんと入っている。それを暫くの間、貸して下さったのは、私が余程欲しそうな顔をしたのに違いない。アウトドア録音の強み、鎌倉～藤沢間を36分で走る江の電の走行音を車内録音したのを覚えている。テープが見つからないのは、100本程未調査の亡父のコレクションの中にでも紛れているのであろう。

史実を補足すると、フィリップスのコンパクトカセット「C-60」と、レコーダー「EL3300」は、1962年、ヨーロッパ市場に限定登場。録音ボタンは小さな赤い丸形、カセット収納部に窓がなく、テープ残量を確認する術がなかった。先述の日本市場向けは「EL3301」、27,000円。後継の「EL3302」で、録音ボタンが長方形に替わり、誤消去防止メカニズムと、テープ残量が見える窓穴追加の小改良が施された。1966年には松下電器が「EL-3301T」の型番でライセンス生産を始め、アイワの「TP707P」、ソニーの「TC-100」など、自社開発製品も出揃った。



欧州仕様のフィリップス EL3300

オープンリールからカセットへ、変遷の兆し

こうしたメディアの世代交番は、その時代の中に立っていると、客観的には捉え難い。振り返って、幾つか興味深いものを拾い出してみた。まず、年月を 5 年程、巻き戻す。



1960年、東北本線の特急「はつかり」を、蒸気機関車牽引から長距離運転のディーゼルカーに置換えるべく、開発を急いだことが裏目に出て、口の悪いマスコミから、「事故ばつかり」と叩かれた。乗客の意見をニュース映画会社が取材しているシーン、肩から下げている大きな箱が、当時の録音機。テープはオープンリール、型式はソニーの「M-4」辺り。M は、Movie＝映画の意味で、動力源は何と、蓄音器から踏襲した手巻きのゼンマイ。終戦直後の「街頭録音」に用いられて以来、「デンスケ」の愛称のまま、大きくは進化しておらず、屋外での録音はここまでの大事(おおごと)だった。

テープ自体の録音性能にはひとまず問題がないとなれば、走行メカニズムの電動化は誰でも考える。ところが、その速度（専門用語では、ワウ・フラッターと呼ぶ）を均一に保つことが容易ではなかった。結果、その基準の甘い家庭用から先に小型化と電動化が始まる。

設計思想は大きく二手に分かれた。一つは、曲がりなりにも、録音機とは別のスタジオの機械での再生に耐えられるように、9.5 cm/秒の規格は守ろうというもの。言うのは簡単だが、当時その路線を行ったのは、少数派。現実にはプロが使えるだけの精度が出ないのである。



アイワ TR-40R (3インチ)

サンヨー M35 (マイクロパック)

それならば、いっそ声のメモに徹して、他の機械との互換性は端から諦めるというものが現れる。定速を保証しなくて良いとなれば、リールの巻き始めと巻き終わりで速度が異なるのもお構いなし。安価に作るには都合が良い。左は、アイワの3インチタイプ、右はサンヨーのマイクロパックと称するエンドレスのテープカートリッジを用いるもの。音質は言わずもがなを乗り越え、後者に至っては「会話を主としたメモ用なので、音楽の録音は満足にできません。」とマニュアルに明記してある。テープ取り扱いの煩雑さを克服しようとした先見の明は評価できるが、これらはいずれも、音の出る玩具の領域を越えることはなく、一時の徒花に消える。

このようにして、小型のポータブルはフィリップスのカセットが出る前の時期、商品として成立してはいたが、プロユースとは成り得ず、音楽用としてはアマチュアも手を出さず、それを真に必要とするビジネスの場面で限られた用途に用いられているに過ぎなかった。

5年程遅れて登場した新顔のカセットは、先駆者たちの作り上げた不信の先入観払拭に苦労しながら、ジワジワと活躍の領域を拡げて、最終的にはオープンリールを完全に駆逐するまでに成長するのだが、その過程は、後の章で追々見て行くことにする。

3インチ、ポータブル 「ソニー TC-900」

1960年台の半ば、カセットは登場したものの、直ぐに信頼を得るには至らず、オープンリールが勢いを失ってはいなかった。 径の小さい 3インチリールのポータブルタイプは、スパイ映画の小道具として、見た目の面白さはあったが、玩具の域を出ないものが多い中、日立の「TRQ-370」は、テープの等速性を保証するキャプスタン駆動方式、端面のツマミは肩から吊るした革ケースに納めたまま、片手で操作することができるガッチリした造りなど、報道関係者の取材用を主眼に捉えているのが明らか。



ソニーの「TC-900」は、それに比べれば家庭用の造りながら、録音レベル調整は上位機種譲りの「ソニオマチック」を搭載、鉄道ファンが小田急のロマンスカー車内で録音するには打ってつけの手軽さだった。



1965年、16, 800円

テープレコーダー、入学祝いの錦の御旗

音楽は、ジャンルを問わず趣味として公汎なものだが、楽器を演奏するのと聴くだけなのでは人口がうんと違う。ビジネスで捉えれば、市場の大きい方が企業に取って魅力的なのはテープレコーダーもその例に漏れない。零細なソニーが苦心して種を蒔いた後、実りの収穫を見てから参入するのが松下電器の経営思想。ソニーは面白くなかっただろうが、新たに加わった購買層の増加で、自社の売上も却って躍進した。



売り込みの殺し文句は、勉強用。中学から新たに始まる英語のリスニングに欠かせない、と言うのである。カタログには、「ご入学おめでとうございます」、とある。当時、中学生や高校生の入学祝いといえば、万年筆、腕時計、革靴の辺りが、三種の神器。テープレコーダーは、トランジスタラジオに比べ、勉強用の錦の御旗を打ち立てたところが賢かった。

実際、英語の勉強に使ったのだろうか？ 当時、ソニー TC-111 を使っていた私が良く知っている。貰ってしまえばしめたもの、実際はラジオの音楽を録音して何回も聴くのだ。今に残るテープは、ナンシー・シナトラ、「シュガータウンは恋の街」、テレビの「サンダーバード・マーチ」、などなど。勝浦捨三先生のラジオ講座、「中学生の勉強室」など、とっくの昔に処分、残ってはいない。

ソニー TC-6250 テープデッキ

1968年、一浪の後、大学入学。自宅から大学まで 2時間、無理して通えなくはないが、理工学部の実験が始まると通うのは辛い距離だったので、2年次からは下宿をした。

当時、戦後生まれの理系の大学生には、カメラ、オーディオ、クルマが、趣味の分野の基礎科目だったので、預金をはたいてステレオはコンポーネントで揃えた。FM 東海が、試験放送を終えて FM 東京に昇格、深夜放送の人気番組「ジェットストリーム」が始まったのも、この頃。

生活費は親掛かりだったので、家庭教師のアルバイトで稼いだお金は全部 LP レコードにつぎ込む。テープデッキにまではお金が廻らない。当時つき合っていた女の子が、家のコンソールステレオにテープデッキをつなぎたい、と言うので、ソニーの TC-6250 を推薦。ときには、それを貸して貰うこともあった。



ソニー(株)、TC-6250 テープデッキ、1969年

借りたものを、まるで自分のもののように扱っているのには訳がある。所属していたサークル、「室内楽同好会」を立ち上げた当時、学内での演奏会に裏方の手が足りず、記録写真の撮影は理工学部友人に頼みつつ、録音はこの機械で私が担当していたのだ。（テープレコーダーは、大学の備品としてあったに違いないが、ステレオではなかったのだろう。）



「太(ふと)ハブ」と称する、音楽専用の 7 インチテープ。19.5 cm/秒の 4トラック、ステレオ録音、音質は申し分なし。当時の腕のレベルがどんなものであったかを包み隠さない正直なマスター録音が残された。

箱は演奏会の記録写真に手描きのレタリングでタイトルを入れたもので化粧仕上げ、演奏曲目の説明とメンバー紹介はタイプライターで印字、という、仲間の得意技を総動員した、正に手作りの結晶。タイトルに、第二回、とあるが、前年の第一回は、写真が残るのみで、公式音源は残っていない。誰もそこまで頭が廻らなかったのだと思う、

1972年、卒業、就職と殆ど同時に結婚。テープデッキの持ち主が家内になったので、デッキは自動的に我が家のシステムに組み込まれることになった。（それが目当てで結婚したのではないので、念のため。）同好会はその後、程なく管弦楽団に昇格、毎年 2 回の定期演奏会が、今では 80 回を越えた。

カセットテープデッキの初代 TEAC A-20



ティアック(株)、1968年、35,800円

当時は、新入社員の仮採用期間は 6ヶ月であったが、その間も慶弔休暇を貰うことはできた。結婚式の主賓、大学のシステム工学研究室教授の形通りの祝辞に続いて、入ったばかりの会社の上司の祝辞が、シッカリ、カセットテープに残っている。「仮採用期間中に結婚休暇を取った新入社員は前代未聞。大馬鹿者か余程の大物か、いずれか・・・。」ドキッとするような際どい表現に、参列者一堂、凍り付いたが、ひな壇の上の私が笑ったお蔭で、ユーモアなのだろう、一堂胸を撫で下ろしたもの。

録音に用いたのは、父が自宅のステレオに接続していた ティアックの A-20 カセットテープデッキ。当時、私はカセットなる新参者を音質面から音楽用としては信用していなかったのだが、新しい物好きの父はそんなことはお構いなし。後年から振り返れば、この機種は、本格的なオーディオセットに組み込むべく、アンプなしのステレオテープデッキとして発売された嚆矢だった。本体と一緒に残されたティアック本社発行の領収書と英文の保証書は、国内流通を待ちかねて入手した現れなのかも知れない。

テープレコーダーでのロールプレイ新人研修

会社での最初の配属先は、電気制御部品の営業だった。

平日は外回り専門なので新人教育は土曜出勤。客先で新商品の開発に探りを入れながら、相手が興味を持ちそうな自社製品を紹介する。その話術体得にテープレコーダーが使われた。先輩が黒板に前提条件を書き出し、気難しい客先の担当者を演ずる。汗をかきながら何やら説明しているのが私で、脇でメモを取るのは同僚。一幕演じた後でそれを再生、どこが駄目なのかを指摘される。鏡を見て脂汗をかくのはガマガエルと同じ、テープレコーダーは正直な憎き鏡であった。OJT (On the Job Training) などという気の効いた言葉はなかった頃。今日ならビデオで訓練するのだろうか。



会社の備品のテープレコーダー、機種はこの写真からだけでは特定できない。ソニー製とは限らないが、性格的に似ているのは、1964年製のTC-357の辺り。テープのかけ外しが簡単で、録音レベルを自動調整する「ソニオマチック」機構を初めて搭載した、極めて使い易いモノラル機。写真は1972年なので、もう少し後の時代のものかも知れないが、その頃になると、こうした業務用のガッチリしたものが意外に少ない。恐らくは、松下、日立、東芝辺りの、同じ性格の製品だったのだろう。

ナショナルのカセットレコーダー（RQ-413）



松下電器産業(株)
RQ-413、1973年

入社半年で滋賀県の工場勤務になったら、通勤は自転車で 15分。東京の通勤地獄は何だったのか、あり余る時間を有効活用して英会話の勉強に励むべく、ナショナルのカセットテープレコーダーとリングフォンの教材を購入。

最初、音楽用に使える音質は期待していなかったが、使ってみれば申し分のない性能。その上、マイク内蔵、自動音量調節なので、録音されている相手は気付かない。友人の結婚式に持って行き、さりげなく式の雰囲気や録音して贈ったら、とても喜ばれた。その行き帰り、ついでに録音したローカル線の車中の音も、今となっては貴重な記録になった。

再度の転勤で東京へ戻り、娘が生まれたのは 1975年。子守唄代わりにクラシック音楽を集めた BGM のカセットを作って聴かせるうちに、子供が自分で触り始める。「マイファーストソニー」や、サンヨーの「ロボ」とかの「知育玩具」という言葉が当時あったのかどうか知らないが、あり合わせのナショナルを玩具代わりに使わせた。酷使が祟ったのか、設計寿命を全うしたのか、動かなくなった時点で（普通はそれだけでは処分しないのだが）、余りにも汚かったので、お払い箱にしてしまった。

マニュアルが残っているので詳細を思い出すことができるが、これは使い易さに徹底した設計思想抜群の名器。元祖、フィリップス EL3300 も

割り切った設計で、テープの早送りや巻き戻しは指でレバーを押さえ続ける必要があった。それをソニーが TC-100 で改善、カセットの取り出し機構を追加して本家のフィリップスをうならせた。先発を研究し尽くして後発するのが松下の商法。再生と録音が、デザイン的にはワンボタン、機構的にはツーボタン、という巧妙な設計で、早送りと巻き戻しも停止状態から押せばロックされ、再生中に押せばロックされずに押している間だけ音が出ながら進むという「キューボタン」を兼ねている。字で説明するとややこしいが、ウっかり操作したときにそのことに気付くという心憎さ。録音せずに消去だけするという例外的な場合は、マイクを殺すために付属のソケットを差す仕組み。スイッチを付けるのは浅はかな考えで、そんなことをしたら必ず切り忘れ、録音失敗の誤操作の原因になる。そこまで考えての意図的使い難さ。今は、外部電源はコンセントの側に搭載するのが普通だが、この機種は電源コード直結。少し重くはなるが、携帯にはその方が便利だ。

再生産してくれたら高齢者が喜ぶのは、このように、まとまりが良くて基本のシッカリした商品。復刻生産希望の一位に推しておきたい。



サンスイ 「ポルタ・コンポ」 CP-7

1978年に息子が生まれると、人生の一つの節目を越えたお祝いに、自宅のオーディオシステムを全部入れ替えることにした。予算 50万円。今考えると、贅沢が過ぎたが、その位嬉しかった。またぞろ、テープデッキにはお金が廻らない。

その後、住宅事情の変化で、大型のオーディオとは別に手軽なラジカセをリビングに置きたくなり、1982年、少し高級なサンスイ「ポルタ・コンポ」を買った。



山水電気(株) 製品カタログより写真転載
「ポルタ・コンポ」 CP-7 108,000円 (1982年)

写真からは、ラジカセには見えないだろう。実際、ラジカセとは名乗っておらず、「ポルタ・コンポ」は、「ポータブル・コンポーネント(ステレオ)」からの命名。しかし、チューナー部の上に屹立するロッドアンテナが暗示するように、屋外でもバッテリー駆動で使える。コインを工具にして左右のスピーカー部を一体に組み上げ、上部にキャリングハンドルを取り付けると、使い勝手は一応ラジカセと同じになる。(かなりの大型、10.6 Kg のヘビー級を、テニスコートのお供に連れ出す、というのも、ご苦労な話ながら・・・)



(姉妹機 CP-5 カタログ写真)

私の利用方法は、カセットデッキ・ユニットのみに取手を付けて、家の外での録音に持ち出すというもの。電池内蔵で、重量 3.2 Kg、カセットテープ最高音質での連続 7時間録音は、必要にして十分な仕様。

家内が近所の子供にピアノを教えていたので、その発表会では舞台上のワンポイントステレオマイクの足下にカセットメカが控える写真が残っている。電池駆動なので配線が実にスッキリ、文字通りの晴れ舞台。



マイク端子のない CD ラジカセ

「ウォークマン」という録音機能のない屋外用再生専用機は、生み出したソニーですら予想しなかったような勢いで 1980年頃から社会に浸透し、カセットテープ規格の創案者、フィリップスはソニーの強硬な主張でそのライセンスを無償公開にしたことを大いに悔しがったという。

私個人は、屋外で音楽を聴くウォークマンには一向に縁がなかったが、娘や息子の世代は、小遣いで買っては使い潰すことを繰り返したようだ。

前の章で触れた、リビングで使っていたサンスイの「ポルタ・コンポ」が10年とは持たずに潰れたときのこと。会社の昼休み、駅前まで食事に出た帰り道、偶々覗いた電気製品量販店に、CD 組み込み、カセットもデュアルで動くラジカセが、大した値段でもなくて置いてある。頑張れば片手で持てる重さ、クルマ通勤だったこともあり、その場で衝動買い。カタログも読まずに買う、などというのはそれが初めてのことだった。喜んだのは高校生の息子。早速、自分の部屋に持ち込み、友達から借りたカセットや CD を自分のカセットにダビング、随分重宝したようだ。



私が生録音をする段になってマイク端子を探したら、見つからない。マニュアルを読んで判明したのは、何と、外部マイクを繋ぐことが想定されていないのだ。遅ればせながら理解したのは、再生専用のウォークマンと、カセットテープから CD へのメディア交替の二段階で、生の音を記録する、という習慣自体が過去のものになってしまっている、という事実だった。

ソニー TC-6250（多重録音改造機）

当時、アナログのシンセサイザーで遊んだこともあった。モノフォニック（単旋律）なので、和声を作るにはマルチトラッカーと呼ばれる 4トラックとか 8トラックが独立して扱えるテープレコーダーが欲しかったけれど、子育ての真っ最中、そんなお金はない。そこで、手持ちの TC-6250 が、2トラックながら、左右の録音ボタンが独立しているところに眼を付け、消去ヘッドのところに簡単なバイパス機構を増設して、サウンド・オン・サウンド（重ね録音）ができるように改造、これをマルチトラッカーに見立て、「ピンポン」と呼ばれる面倒な手法で、四声の作品を作ったことがある。



レコード会社のミキシング卓のようなパッチパネルの付いた電子楽器は KORG（京王技研）MS-20。一見、両手で弾いているように見えるが、左手はトーンホイールの制御で、鍵盤は右手のみで、右下にチラリと見えている家内の嫁入り道具、木目のピアノには出番がない。

今は、この大掛かりな装置一切が Mac 付属のソフトウェア「ガレージバンド」に含まれる。操作法を学びがてら、四声の作品を作ってみた。失敗してもやり直しが効くから緊張感もなく、苦勞がない分、完成の感慨も薄い。それは、便利なデジタル機器に共通な皮肉な一面と言える。

ソニー 「カップパブックス」

日本の会社から外資系へ転職したのは 1988年、40歳のとき。 その頃、職場に持ち込んで使っていたのは、光文社の新書「カップパブックス」と同じサイズが売り物だったソニーのカセットテープ。



ソニー(株)、TCM-1000A
1987年、29,800円

上級職に移行するためには 1年間に亘って、本職とは別のプロジェクトに参加し、その活動を通じて経営マインドが試される。 その一貫で、広報の立場で香港の高級ブランド店に取材に行くことになり、持ち出したのが、件の「カップパブックス」。 会議の記録には最適なエレクトレットコンデンサーマイクを内蔵しているが、取材という目的に合わせ、ワザワザ学生時代から使っているダイナミックマイクを持って行った。



写真は「ポルシェ・デザイン」の香港店。 偶々なのだが、ブラック&シルバーが売り物のソニーもこの雰囲気には負けてはいない。

サンヨー オットー RD-5600 カセットテープデッキ



古い機械類を動態保存する、という年寄りじみた趣味が他人様の耳に入ると、「若いのに感心。」と仰る方が現れる。1996年に拝領した戦前のSPレコード139枚は、70歳の方から48歳の私への生前贈与だった。ご本人が生まれる前、片面カッティングの歴史的なお宝が、なぜ？と思ったら、欧米渡航の経験がある父上の遺品なのであった。

貴重な音源は、骨董屋で買った蓄音器が元気なうちに、と父からお古を貰っていたサンヨーのオットー RD-5600 カセットテープデッキでダビングを始める。1999年、鹿児島のお祖母の家を取り壊した際に貰い受けた戦前の蓄音器は、同じポータブルでも、整備したら音の良さが違う良品。バックアップ体勢が改善されたと思ったら、同年、父が他界、テープデッキもまた遺品となる。

それから、10年余が経過。蓄音器は元気なのに、カセットデッキの方が先にくたばってしまった。寄贈下さった方は海軍兵学校の最終卒業組、86歳で益々お元気なのは流石。二廻り近く歳の違う私が既に博物館への寄贈や貸与を始めているのは、先人達から生前贈与の姿勢を学んでいるからである。

マイクロカセット・テープレコーダー 4種



手前左： オリンパス光学工業(株)、「パールコーダー S」、1974年

手前右： ソニー(株)、「プレスマン OA」、1981年、35, 800円

奥： シャープ(株)、「リンクス・マイクロ」、1981年、79, 800円

この 4機種、いずれもリアルタイム(実年代)では使っておらず、骨董品になってから私の保有となった。

「マイクロカセット」は、1969年にカメラのオリンパスが旧来のカセットの半分もない新規格を用いて、「パールコーダー」で異業種参入。本業のカメラで培った精密加工技術や、表にビスの頭を全く見せない意匠への配慮には試作品を見たソニーもビックリしたが、商売としては、家電品の販売ルートを持たないことから、最初は、「千趣会」の通信販売組織を通じて、英語やフランス語の専用教材との抱き合わせからスタート。軽薄短小がお家芸のソニーとしては看過できず、直ちに追撃出動。マイクロホンより僅かに大きい箱の中に録音機能の全てが収まる「ワンハンド・タイプ」は、政治家への突撃取材で言質を取る際の強力な武器となった。

1981年、ソニーは「プレスマン OA」で、世界最小のタイトルを取り返す。当時の私の認識は、「高級玩具」。買わなかったけれど、後年出会えば往年の評判を知っているから見逃さない。

前頁の写真後方、「リンクス・マイクロ」は、小振りのステレオラジカセの中に、マイクロカセットどころか、3インチのブラウン管テレビまで組み込んだ、それこそ玩具。こういうものに節操のなかった父の遺品だ。テレビは2011年まで生きていたが、アナログの停波で電波の方が先に死んでしまった。（経過措置のCATVのアナログ変換放送は映るものの、これも2015年で終了。）FM・AMチューナーは健在だし、小振りな割に音の良いスピーカーには今でも出番があって、重宝している。

マイクロカセットの音質は、凡そ電話程度のものなので、留守番電話の会話記録用には、正にピッタリだった。



タカコム AT-600

カセットが2本並んでいるのは、かかって来た電話に不在案内のメッセージを流すものと、相手からの伝言を録音するものとを分ける必要から。写真の「タカコム」は、元は「高千穂交易」という名前だった電話機関連専門メーカーの製品。「留守番電話」の名前が示すように、後に電話機との一体化が進み、録音媒体も今ではICチップに代わっているが、家電量販店にマイクロカセットの在庫があるのは、古い留守番電話が結構健在だから。確かに、電話機は10年やそこいらでは壊れないだろう。

テクニクス RS-1506U 「2 トラ 38」

「2 トラ 38 (ツートラサンパチ)」とは、テープ全幅にステレオ 2トラックを 38cm/秒の速度で録音再生する音質最大重視の機種を指す。



松下電器産業(株)、1977年頃、244, 000円

マニアックな世界が門外漢には不可解なのは「録音マニア」に限らないが、「音楽愛好家」、「楽器演奏者」、「レコードファン」、「オーディオマニア」の何れとも中心軸は一致しない。オーディオマニアが高じると一度はプロ仕様の「2 トラ 38」に憧れるが、30 ～ 30, 000 Hz の高性能が生きるのは原音の生録音に限られる。重量 23Kg の本機と単一乾電池 40本（4本の誤植ではない）の外付け電源を担いで野原を歩き、日に数本しか通らない蒸気機関車を狙ったり、森の中でいつ啼くとも当てのない野鳥の声を待ち受けるなど、私でも想像を絶する。

そんな機械を所蔵するなら正真正銘のマニアではないか、と言う勿れ。置き場所のことで揉めた従兄弟とその頑固親父を仲裁すべく、貰ったのである。1506U は基本型の 1500 と違い、より互換性の高い 4トラック仕様なので、使い勝手抜群。（2トラックも再生はできる。）いずれ、実家を出た従兄弟が、返してくれないか、と頭を下げて来るだろう。

ソニー TC-357 テープコーダー



来週から「録音の歴史」企画展示が始まるという矢先、知らない方から、イベントで予定していた「昔のテープを聴く会」を先行でお願いできないか、という連絡を貰った。奥さんの実家で古いテープが見つかり、幼い頃の記憶では、亡くなられた方の声が入っている筈だと言うのだ。取り敢えず現物を郵送するように告げると、3号リールのテープに新品のカセットと丁寧な依頼状を添えた小包が、間髪を入れず宅急便で届いた。

我が家の現行オーディオは、古参の LP が一等地を占めており、新参者の CD は隙間に居候の身。別室の「2トラ 38」は、小さな 3号リールにはテンションが強過ぎて危ないから、ご隠居待遇の TC-357 にお出まし願ひ、カセットへのダビング回路を即席で作る。故人の声らしきものは入っていないが、フォークバンドのラジオ中継など、ダビングのカセットをメール便で即日発送。商売になるかどうかはさておき、こういう需要が確かにあるのだ、ということがハッキリしたことを良しとしよう。

後日談。期待の故人の声はなくても、当時のラジオ番組の思い出話で、法事の席は大いに盛り上がった由、故郷の名産品が送られて来た。

カセット・ウォークマンの行き着いたところ

「ウォークマン」はソニーが創成した新造語。他社は使えない登録商標なのに、事実上は一般名称として、1979年の登場で市場は爆発的に拡大、音質面では行き詰まりかけていたフィリップスのカセットテープに莫大な利益を齎した。（社会風俗面では、音楽を聴くこと以上に、「公衆の中で自分の世界に埋没すること」を容認した功罪が大きいのだが、ここではそこへの深入りは避けよう。）

CD の登場は 1982年、その 2年後にはもうそれがウォークマンになって登場。音質は良くても、通勤電車の中ではラジオを聴いていた私は手を出さなかった。その後、メディアとしてのカセットテープは、8cm CD だの、MD だの、DAT だのの新興勢力から攻撃を受けつつ、少数野党の乱立は与党に与するばかり、長期安定政権が続く。

90年台に回転体メディアを卒業した「MS（メモリースティック）ウォークマン」が登場したときは、原理上、音飛びがなく、MD 同等音質で 80分の演奏時間を誇ったものの、45,000円の価格にユーザーが逡巡するうちに、今度は記録方式の乱立が混乱を極め、iPod（60 GB！ MB の千倍！）の仕様が示すように、半導体記憶の文字通り桁違いな容量進歩が、商品寿命の短期化に拍車をかける。

その狭間をしっかりと生き延びたカセット・ウォークマンは、小型化のネックだった電池を、Ni-Cd 薄型専用電池（通称、ガム電池）の開発で切り抜け、殆どテープ自体のケースと同寸という極限に到達する。生産コスト削減と並行して玩具化も進み、気がつけば需要層はいつの間にか子供達の世代に移っていた。



赤ん坊だった筈の娘や息子も大学に進学、アルバイトのお金が多少自由になると、二人とも私が知らぬ間に似たような機種を買い、使い潰して動かなくなってから、私の研究素材に転げ込む。



左がソニーの WM-170。右がパナソニックの RQ-SX71。犬猿の仲とは思えぬ程、設計構想が同じだ。共に、往復オートリバース再生、ガム電池仕様の弱点である電池寿命の短さは外付け単三電池ユニットで糊塗している。一点違うのは、ソニーがメカニカルな機構なのに対し、パナソニックは全てをロジックコントロールに移行したこと。その違いが、到達した厚さ寸法に現れた。ケースの 17ミリに比べれば、ソニーの 22ミリでも大したものだが、19ミリを達成したパナソニックの得意顔が目に見えるようだ。（この頃、カセットケース自体が 14ミリまで贅肉を落として薄くなったのも、こうした動きと無縁ではないのだろう。）アルミの板厚は限界ギリギリ、扱いも荒かったのか、息子のパナソニックは、シッカリ凹んでいる。

ケース蓋を開いた際の支点側に磁気ヘッドやキャプスタンを集める構成、狭い空間にキャプスタン軸が潜り込むのは頭で心配するよりは問題がなかったのだろうが、ソニーの録音機能を有する機種は最終的にはそれを辞めて、蝶番から遠い側にヘッドを位置させる昔の構成に戻る。理由は承知しないが、使う側に立つと、操作ボタンの配列などを無闇に変えないことの方が、僅かな寸法差よりも重要なのは確かだ。大事に使い続けても、動かなくなる方が先だろうし、ガム電池も一瞬の線香花火、標準規格には残らなかったから、製品も規格も所詮は使い捨てだった時代、ということなのだろう。

（初出 Mar. 6, 2020）

一応の究極、TCS-90 カセットテレコ

1994年の「TCS - 90」(30,000円)は、極限まで小型化した再生専用の「ウォークマン」が、テープレコーダー本来のステレオ録音機能を取り戻したもの。フェザータッチボタンのフルロジックコントロール、金属薄板にメタリック塗装の外装や液晶表示パネルなど、コストを削っていないから、自ずと高級感が漂う。



単四電池 2本、或は、ガム電池 1個、という仕様もウォークマン譲り。ネクタイピン型のワンポイントステレオマイクが付属しており、ステレオでの録音再生機能を備える。デスクトップとして使う場合はモノラルで十分なので、内蔵マイクとスピーカーは 1つで済ませる、という割り切りのお蔭で底面には稀にしか使わないスイッチ以外、何もなく、操作ボタン、表示部、マイクとピーカーが無理なく上面に配置できた。

デスクトップとしての便利な機能、VOR(自動音声録音スタート)や、速度微調整機能も省略されていない。但し、デスクトップとしては、そこまで小さいことのメリットは薄く、ロジックコントロールのため、メカの立ち上がりが一瞬遅れるのが、気持ち良くない。慣れれば実害はないとも言えるが、壊れて動かなくなればそれでおしまい。「佳人薄命」を絵に描いたような機種であった。

カセットレコーダーは生き残るか？



2010年 10月、朝日新聞が「さらば カセットウォークマン」と題し、ソニーが国内向けの生産を終了した旨の記事を掲載した。もう IC レコーダーに対抗できなくなった、ということ。

背景、スーツケース一杯のカセットテープは、亡父が残した音楽のレコーデッド・カセットテープと、我が家の文化遺産として残したい録音済みのテープ。家内の勉強用が恐らく同量が別にある。内容が貴重かどうかは個々人の価値観に委ねるとして、それら、過去のテープを聴くための機械は、どれだけ少なくなろうが、かなりの長期（具体的には、最低 20年、願望としては 50年）に亘って、供給してくれないと、困るのは私ばかりではないだろう。

上の写真中、録音のできない、所謂、ウォークマンは、WALKMAN の文字が見える正面奥の 1台だけで、他はいずれも録音再生のできるタイプ。（回転ムラが出て来る度に買い直しては旧型を引退させたもので、全く動かなくなったものは、写真に登場していないが、恐らく同数程度は

ある。) 左手奥の縦型は、ウォークマンが生まれる前の時代、ワンハンドのご先祖、TC-1000 (1972年、33, 800円)。右手奥の黒い平型が、カップブックスサイズデスクトップの完成形、TCM-1000A (1987年29, 800円)。これらは、インダストリアル・デザインの観点からも、私が保存の意義を認めるもの。

手前の 3台は軽薄短小の生産技術をウォークマンから逆輸入した録音再生可能な機種。中央が、家内の現用機、「TCM - 450」。利用目的は声楽の勉強用で、オープンリールの頃からの正統的ユーザー。カセットの後、一般的には MD へ移行しそうなところ、長持ちはしそうにない規格、と見抜いた私の入れ知恵で、カセットのまま、今日までやって来た。VOR、半速再生、スピード調節など、必要にして十分な基本を押さえたワンハンドタイプ、お馴染みの単三ではなく、単四電池 2本でスリム化を達成したスタイリッシュな機種である。電池寿命が気になるところだが、一昔前のマンガンやアルカリに比べたらニッケル水素の容量は大きいから、問題はない。そこへ一捻り加え、ニッケル水素充電電池を 2セット購入、常に 1セットは充電しておくような使い方をしている。問題は、アルカリ電池の起電力が 1.5V なのに対し、ニッケル水素は 1.2V しかないこと。どちらもソニーの製品なのに、テレコの側にも電池の側にも、電圧の差について、大丈夫だとも、使わないで下さいとも、保証できないとも、ご自身の判断でお使い下さいとも、何の言及もないこと。実際に使って問題はないようだけれど、同じソニーの製品なのだから、一つのパッケージに収めて保証書付きで売ってくれたら良いのに、と残念に思う。

買ったのは 2012年。壊れたら次を探すのが面倒だから、入手できるうちに予備を買っておこうと考えたら、2014年の時点で、もう見つからない、という有り様。カセットテープは今後のメディアとしては残らない、と見切りを付けられてしまったのだろうか？

試みに、どれだけ音がシッカリしているかは別にして、今我が家にあるカセットレコーダーを数え上げてみたら、8台ある。但し、骨董品として保存されているものが殆どなので、音質に全く問題がないのは、僅かに 2台。カセットテープから CD や IC メモリーにダビングする安手の機械は新聞の通信販売などで眼にするが、余り食指は動かない。いずれ、8ミリフィルムなどと同じように、業者に持ち込んで IC メモリーなどに変換して貰わざるを得ない時代がやって来るのだろう。

Tascam リニア PCM レコーダー

最後は現行販売機種で締め括ろう。東京理科大学近代科学資料館の「録音の歴史」企画展示の図録作成に際し、IC レコーダーにも触れる必要上、使ってもいいもののことは書けないから、急遽、購入したもの。

掌に乗る大きさ、重さ 184g、20～42,000Hz、SN 比 90dB、かつての「2トラ 38」を凌ぐ性能には絶句。昔のマイクロフォンの頭だけ、コードから後ろは何もなく、その頭の中に音が詰まってしまう、という感じだ。スピーカーはモニターがやっとの小型、ヘッドフォンで聴くのは、昔のテープレコーダーを知る者には不便だが、生まれたときから「ウォークマン」の世代は痛痒を感じまい。テープの頭出しも何もなく、ワンタッチでいとも簡単に録音できるのはあっけない程だ。但し、録音レベル調整と生活雑音を入れないための工夫は、50年昔と同じ知恵と工夫が生きる。



ティアック(株)、DR-2d(ホワイト)、2010年、実勢売価 24,800円

テープでは絶対にできない、IC レコーダーならではの特技がある。再生時、速度と音の高さを独立して微調整できるのだ。このお蔭で、個体バラツキの大きい陶製のオカリナの伴奏に、別の調で作られたカラオケ伴奏の音源がいつも簡単にピッチを合わせられるようになった。

ソニー、サーボマチック 6 (TC-860)

仔細は順に記すが、ここからは追記なので、対象物は年代を遡る。



ソニー(株)、TC-860、1967年、28,800円

ソニーの初代インハウスデザイナー、山本孝造氏の娘さんから喪中欠礼のハガキを戴いて逝去を知ったのは 2018年暮のこと。丸でそれと歩調を合わせたかのように、御殿山にあったソニー歴史資料館が閉館。山本さんからは生前貴重な一次資料を開示頂いていた誼、娘さんとも一度だけ面識があったことから、父上のデザイン、代表作の「マイクロテレビ」を皮切りに、月替わりで半年ばかり自宅玄関のアルコーブで企画展示の真似事をして、生前のお付き合いを偲んだ。写真はその 1枚。サーボマチックとは、モーターの回転をフィードバック制御で一定に保つもので、野外録音も可能な電池駆動。最初は松下に先を越されたピアノタッチの操作ボタンに追い付けば、ブラック&シルバーのデザインは、ソニーのお家芸。壁面の額は、厳密には型番の早い TC-800。基本は同じながら、「ソニオマチック サーボ 8」の愛称が垢抜けない。前年、雑誌「アサヒカメラ」の広告なので、「8ミリのトーキ化に」の宣伝文句が見える。

(初出 Mar. 3, 2020)

ソニー、TC-1000 と 1000B



時系列が錯綜しないよう、先に種明かしをしてしまうと、写真は最近、FM 東京の人気長寿番組、「ジェットストリーム」の CD セットを通販で入手した後、往時を思い出しながら撮影したもの。

「ジェットストリーム」とは、80.0メガヘルツのFM 東京が、毎日午前零時から1時まで放送していたイージーリスニングの深夜番組。提供は日本航空、コックピットの無線交信に「ミスター・ロンリー」のテーマミュージックが重なり、城達也のナレーションが続く。「遠い地平線が消えて、深々とした夜の闇に心を休めるとき、遙か雲海の上を流れ去る気流は、たゆみない宇宙の営みを告げています …。」超長寿番組、ナレーションは何人か替わったが、放送開始直後、大学生の頃、下宿で聴いたので、そのイントロだけで一瞬のうちに青春が蘇る。

右手、ブラック&シルバーのカセットテレコが 1972年発売の TC-1000、その左が同機種、黒一色の 1000B。マイク組み込みワンハンド操作の嚆矢は TC-50 が 3年早くアポロ宇宙船に搭載されて有名になったが、スッキリー列に揃ったピアノタッチボタンの操作性とデザインの秀逸さはこちらが決定打、マスコミ関係者の強力な武器となった。再生専用の「ウォークマン」はずっと後の時代。デザインは今見ても素晴らしいが、850g の重さに時代を感じる。フリーマーケットで見つけては入手する内に、色違いが両方とも揃った。ワウフラなしで綺麗に鳴るのはブラックの方だけ。

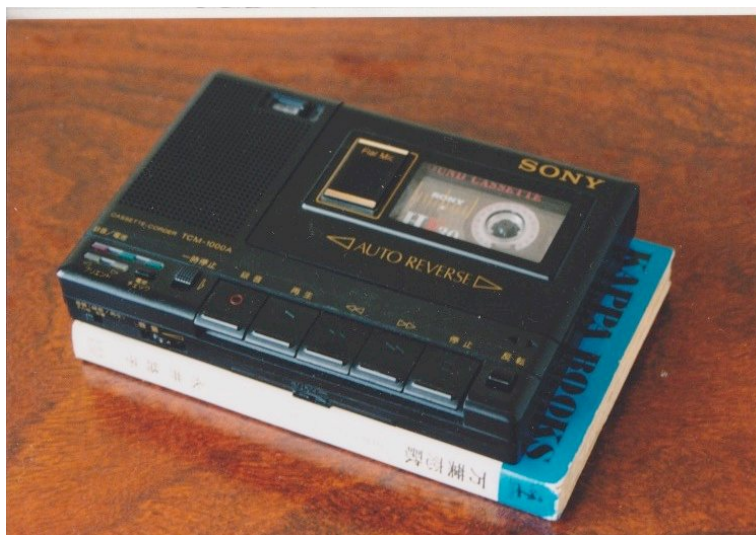
(初出 Mar. 3, 2020)

TCM-1000A の定期健康診断

ソニーの「TCM-1000A」（1987年）は、工房 Nishi コレクション乗の中でも扱いが丁重で、年 2回の定期健康診断を欠かさない。

1968年の TC-1160 「マガジンマチック EM ペン」では、A4サイズ以上あったものを、卓上型の基本、使い易さを踏襲しつつ、カップブックスの大きさにまで小さくした完成形であることが、公の理由。フラットマイク組込みのモノラル、録音は片面だが、再生はオートリバーズの両面。スピード調整は可能ながら、VOR は生まれる前の時代。一世代前のモデルは確かシルバーだったが、当時流行した黒一色、プラスチック自身の弾性を利用して部品点数を極限まで減らし、価格を下げたものと思う。

見た目の高級感はないが、堅実な事務用としての使い勝手は申し分なし。元は個人用だったが、テレフォンセンターの電話システム運用を預かる職務上、オペレーターの通話緊急録音用に、ヘッドセットとインピーダンスを合わせて分岐するケーブルだけ特注で作らせ、会社の業務用に採用させた、そういう思い出の機種である。（p24 と同じ写真を再掲）



加えて、うっかり取り落とすという骨董屋にはあり得ない失態を恥じて、破損したカセット窓を素材から作り直して修理、ワウフラの元凶、メカの駆動ベルトを交換して元の健康状態を取り戻した、という手間のかかったもの。

今回の検診で、また動かなくなっているのを発見。 前回の開腹手術では開腹したまま、縫合前の状態で動作試験中の映像が残っているから、手順に迷いはない。（鏡を用いて表裏両面撮影、実際に鳴っている。）



それでも、小動物の手術と同じで、緊張する。手を伸ばせば全ての道具に手が届く範囲内に揃え、平日の午前中、2時間割り込みがない状態で着手。 予定時間内に終わらないと、麻酔が切れて来るような一種の焦りを感じるのだ。 最悪、成仏なのは、機械も生き物も同じこと。

一般消費者向けの商品は手がけたことがないが、元機械設計者の端くれとしては、頭を使いながら、力のかかる構造体の支えなのか、化粧ビスなのか、それを外すと何が起きるのか、考えながら外す。 外した順序を忘れないための準備もして、どこで諦めても撤退の道を確認しながら外して行く。 この性癖はどこから来るものか、自覚はない。 TCM-1000A に設計者の良心を感じるのは、部外者には開けられないよう隠すのが普通のケース裏蓋を外す手順、一度に外す 3種、6本の異なるビスに、共通の目印が刻んであること。 但し、その目的がなければ見えて来ない符丁だし、どちら向けに開けるのかを間違えたら、パリンと割れる程の厚さしかないから、散々苦勞したピラミッドの盗掘者が命からがら出口に戻った段階で、初めてその意味が判る目印みたいなものかも知れない。

カセットテレコの寿命を左右するのは、ほぼ間違いなく駆動ベルトの劣化。オープンリールの時代には熱溶着可能なポリウレタンで長さを合わせて自作する手法で道が開けたが、カセットの大きさとなったらお手上げ。生ゴムの輪ゴムは柔らか過ぎて張力が足りないのを太さで補うにせよ、その幅は極めて僅か。長さの異なるものを普段から溜めておいて、合いそうなものを選別して使う以外に方法がない。



開け方を示唆してくれているだけのことはある。ベルトの走行系がこんなに丸見えな機構も稀だ。見えていながら、メカを分解せずに外す手順で諦め、お陀仏にした機種がいくつもある。左上の切れたのが元のベルト。この間に合わせの細さでは持つ訳がない。それに比べれば、今回のピンク色のは少しは頼りになりそう。

カセットを裏返さずにワンタッチで裏面の連続再生なんて無茶な要求を出すのがマーケティング部門、それ応えるのが開発部門。真鍮の円盤が正逆両方向スピンドルのフライホイール。右端の銀白色が扁平駆動モーター。時計方向に回ると、カセット A面再生になる。速度ムラに一番厳しいピアノ録音のテープを入れてテストする。双方向とも動くには動くが、逆方向だけ、声楽ならバレない程度の微妙なフラッターが掛かる。プーリー間の自由走行距離が正逆等しくないため、ベルト強度不足が、片方だけ音質に影響するのだと見抜いた。否、聴き抜いた。仕方ない、年寄りにはそれがバレないよう過ごすのも処世術のうち。

(初出 Mar. 8, 2020)

エピローグ

書き終えての再発見は、「ティアックは良い仕事をしているなあ。」ということだった。A-20の頃は私も半信半疑だったが、英国製タンノイのスピーカーは代理店の世話になったし、気が付けばICレコーダーもティアック。それだけなら、個人の好み、で片付いてしまうが、現役時代は仕事に忙しくて没交渉だった大学の同級生とお互いが暇になってメールのやりとりが復活すると、何と今も昔も愛用の機種が一致する。同好の一派を代表して言うなら、新商品開発の路線は、もう少し長い目で技術の変革と社会での使われ方に対応し、近視眼で売れ筋商品を追い回すのは止めて欲しい、ということだ。ソニーはその点、反面教師になってはいないか？折り合いの悪かったパナソニック（元の松下電器）は、テクニクスのブランドを復活させた、というのに・・・。

ナショナルのカセットレコーダー(RQ-413)の章、19ページの写真に混乱した読者もおられよう。文中、かつて使ったものは処分したので再発売を希望する、とある一方、写真は当時の再現ではなく、今日から当時を振り返っているのが歴然。さては再発売されたか、と勘違いされる前に釈明すると、その後、秋葉原の骨董品ショップで目ざとく見つけたものを迷わず購入したのである。正に完動品を越えた感動品。執念というか、嗅覚というか、我ながら呆れるが、記事の趣旨は変らない。再発売どころか、お気に入りの現行製品すら、廃番になってしまい、入手できるのは数千円しかない、味も素っ気もない安物だけになってしまった。

ソニー資料館の閉鎖に端を発する身辺変化の後日談。

閉鎖を残念には思っているところへ追い打ちをかけるように、展示品を貸し出したままの博物館から、大幅な展示内容更新のため、暫く閉館するとの連絡を受けた。となると、企画展示から縮小しつつ、一般展示に廻っていた品々には最初に影響が及ぶだろう。同じ立場の仲間と連絡を取り合ううちに、果たせるかな、貸出品は全て引き取るべしとの連絡。身分は元々無給前提のボランティア技術員、失業ではないものの、気持ちの上ではそれに近いものがあつた。

数年前から老前整理の一環、受け入れ先のあるものは寄贈を進めて来たが、戦時中の疎開と同じく平時とは異なる状況下、相手が望まないものを押し込むのは遠慮したので、自宅に引取った結果、自宅が動態試験の作業場となる。

8年ぶりに動かすと、動かないものものよりは、息を吹き返したもののの方が多かった、という程度の生存率。こちらも歳だが、毎日の運動が大切なことを、骨董機械たちが身を挺して教えてくれる。

元々、自宅から溢れた膨大な骨董機械は、親が保有する富士南麓の山小屋の屋根裏部屋で余生を過ごして来た。



「収蔵庫」、格好をつけて言えば、「アーカイブセンター」だろうが、島流しの後、赦免船が迎えに来るのを心待ちにしたという俊寛僧都の昔話をもじって、私は「機械ヶ島」と呼んで来た。実際、ここに収容の後、国立の博物館からお呼びがかかり、企画展示に参加の後、価値が再認識されて寄贈が受け付けられ、名誉回復したものも数点はある。そこまでの栄誉ではなくても、我が家の予備機に復帰しているものは何台もある。

個人コレクターで収蔵庫の容量に悩まない人はいないので、羨ましが声も聞いたけれど、やってみて分かったのは、ネックは容量ではなく、自分の管理能力にある、ということ。9年前に母が亡くなり、兄弟間の話し合いで私が相続したので、再度そこへ収蔵する手もなくはなかったのだが、自分の歳を考えて、それはせず、逆に山荘ごと手放すことを決心した。

最後に本論に戻ると、録音文化の衰退は、映像のおまけ、という扱いと無縁ではないという気がしてならない。テレビ画像の大型化、高解像度

化が進み、ホームシアターの贅沢は 4K、8K テレビという業界の思惑で更に加速するのだろう。「録画」の概念は残っているがオンデマンド配信が始まれば消える可能性があり、「録音」は音声通話の電話以外、既に死語なのかも知れない。

いつの時代も、親がその時代精一杯のものを残す子供の成長記録。8ミリビデオで撮影した昔の子供の成長記録は、後々、結婚式の生い立ち紹介に使われるのが最高なのだろう。我が家では未だ 8ミリのフィルムとカセットが個々に分かれていた時代、カメラと録音の一人二役は大変だった。未だに映像と音声は別々のままだが、それらを合成編集するのは被写体に残る娘か息子の役目。何も残っていないのに比べたら、遥かにマシな筈

今の赤ん坊の成長記録、30年後に同じ規格で再生できることは一体誰が保証するのだろうか？ 8ミリフィルムの時代から、映像に音を付加する努力には大変なものがあり、それがテープレコーダー活用の一面を担った時代があることは、追加した本文で一瞬触れたけれど、それが目的だった訳ではない。写真がネット経由で送れるようになり、「写メ」なる新語誕生から未だ僅か 20年。帯域幅の桁違いな進化で、リアルタイム送受信が普通になってしまった。

音声記録の一面だけで時代を眺めて来たが、その背景にあるものは、「人間の輪廻転生のサイクルと技術革新に伴う規格変遷を如何にマッチさせるか。」というより広範な問いかけ。次世代の方が深意を汲んで下さる可能性に期待しつつ、5年ぶりに改定した本節の筆を擱く。

2015年 4月 20日 初稿

2020年 3月 9日 補筆改訂

西 志郎

著者略歴

西 志郎（にし しろう） 本名：西村 志郎（にしむら しろう）

1948年鹿児島生まれ、神奈川育ち。埼玉大学理工学部卒。立石電機(現 OMRON)にて自動改札機や電話交換機の SE 業務の後、AMEX 日本支社情報システム部代表、機械化温室プロジェクト、大学非常勤講師などを経て 2006年未定年退職。元東京理科大学近代科学資料館ボランティア協力員。

テープレコーダーのあった風景

2015年 4月 20日	原稿完、初版オンデマンド印刷発行
2018年 4月 24日	PDF 電子版
2020年 3月 10日	第2版 補筆改訂
2021年 8月 3日	HP 公開用に PDF 化 (全 43ページ、MS Word 5.7 MB)